

伝統校にふさわしい 魅力ある新聞づくりをめざして

兵庫県高砂市立竜山中学校教諭 上野裕子

学校創立以来、新聞づくりに熱心な取り組みを続けている兵庫県高砂市立竜山中学校。学校新聞「竜の子」は、この5年間全国小・中学校・PTA新聞コンクールで上位入賞を果たしています。地域への情報発信においても重要な役割を果たしている「竜の子」。そして校内新聞コンクールの開催や個人新聞の発行。また、学級新聞づくりがもたらす教育効果などについて、新聞・生徒会広報担当として新聞づくりの指導にあたっている上野裕子先生にその様子を伝えていただきました。

創立時より新聞づくりが盛ん

兵庫県高砂市立竜山中学校は、昭和60年に開校された、高砂市内でも比較的新しい学校で、今年で創立20年を迎える。現在、各学年4クラス、計12クラス（生徒数455名）の規模校である。

本校の位置する加印地区（高砂市・加古川市・稲美町・播磨町）の中でも特に本校は新聞づくりが盛ん

な学校である。開校時に新聞づくり

を熱心に指導した教師が存在して以来伝統が培われ、今日まで学級新聞が発行されてきた。そのため、新聞づくりが学校生活や行事の中に自然と組み込まれ、生徒による学級新聞づくりが定着している。

12年前に竜山中学校に転動してきたときは、生徒たちが抵抗なく新聞づくりに取り組む姿を見て感動すら覚えたものだ。そして、私自身、新聞・生徒会広報担当は今年で6年目を迎える。

この5年間、毎年全国小・中学校・PTA新聞コンクールで学校新聞「竜の子」が上位に入賞し（毎日新聞社賞、全国新聞教育研究協議会賞……一昨年度は審査委員会賞、昨年度は理想教育財団賞と新聞と教育賞）、東京で行われる表彰式への参

加が年中心事のようになってきたことは、喜ばしい限りである。

生徒会発行の学校新聞「竜の子」全校生へのアンケート調査も

学校新聞「竜の子」は本校創立以来20年の歴史を持つ伝統ある新聞で、生徒会広報委員長が発行するものである。

現在121号で年6回の発行を続けてきた。例年だと大きな行事の後に発行するということで、修学旅行、体育大会、文化祭などの行事の後に発行していた。

ただ今年は生徒会広報委員長が発行数を増やすことを公約に掲げ、定期的な発行で、より「竜の子」に親しんでもらいたいと、毎月1回発行している。

「竜の子」の内容は、主に学校案内や修学旅行・体育大会・文化祭・



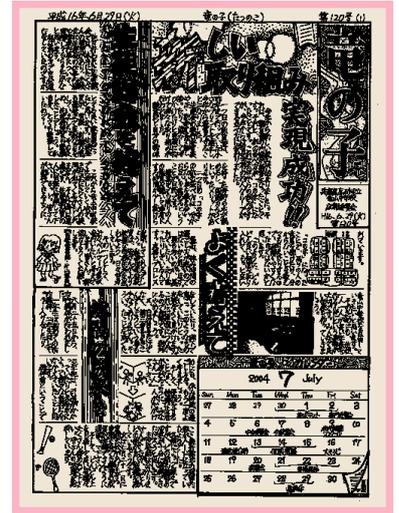
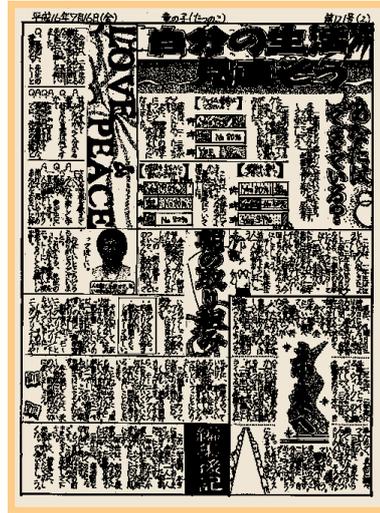
「竜の子」のアンケート集計をする広報委員長



生徒会選挙などの行事が中心で、ほかに生徒会での取り組み、各委員会からのお知らせ、学校を挙げての花いっぱい運動、募金活動、ボランティア活動なども紹介している。本年度の新しい試みとして、現在の竜山中の「実態調査」ということで、全校生にアンケート調査を行い、学習面・生活面での見直しを図っ

高砂市立竜山中学校





「竜の子」は全校生徒
を果している。また
域を結ぶ重要な役割
は学校と保護者・地
域の方々にも広く読
まれている。「竜の子」
は学校と保護者・地
域を結ぶ重要な役割
を果している。また
「竜の子」は全校生徒

た。また今年から学校全体での朝の
読書を取り入れたり、机の配置を
「コの字」にしたりと改革がなされ
ており、それについての意見も広く
求めた。また竜山中のいまの問題点
を掘り下げ、学校全体の問題として
みんなで考えていく契機とした。
地域への情報発信
学校と保護者・地域を結ぶ「竜の子」
またもう一つの本年度の新しい試
みは、地域の人への「中学校からの
情報発信」である。
これは、地域に向けて、「開かれ
た学校を」ということで、「魅力の
ある地域から信頼される学校づく
り」を進めるために、学校からの通
信物を1〜2ヶ月に1度、教員が校
区内の団体に届け、学校の様子を地
域に知らせていこう
というものである。

学校新聞「竜の子」
はこのときに地域に
配られており、単に
保護者だけでなく地
域の方々にも広く読
まれている。「竜の子」
は学校と保護者・地
域を結ぶ重要な役割
を果している。また
「竜の子」は全校生徒

にとつて新聞づくりのよい手本とし
ても役に立っている。
校内コンクールを年2回開催
本校では毎年校内新聞コンクール
を1学期はB4サイズ1枚、2学期
はB4サイズ2枚（昨年から加印地
区新聞コンクールの規定が1枚に変
わり、それに合わせて1枚）で、年
に2回行っている。
専門委員会広報委員に新聞のつ
くり方についての講習会を行い、基
本的な指導の後、生徒たちは「竜の
子」を参考に各クラスで新聞づくり
を始める。修学旅行や体育大会、文
化祭などの大きな行事があるときは
各クラスとも特に熱心に取り組んで
いる。
学級新聞は、毎月1回発行してお
り、発行された全クラスの新聞は生
徒玄関前の掲示板に掲示し、全校生
がお互いの新聞を見て参考にした
り、高め合うことができるようにな
っている。
行事終了後に個人新聞づくりも
全校生がつくる新聞として個人新
聞が挙げられる。
1年生では2泊3日の野外活動後
に書く「野活新聞」、2年生では兵
庫県で今年で6年目となる5日間の
社会体験をする「トライやるウー

ク」後に書く「トライやる新聞」、
そして3年生は修学旅行後の「修学
旅行新聞」。
出来栄のよい新聞はPTA広報
誌に載せたり、校内の掲示板に提示
したり、また学年によっては学年生
徒全員分を印刷し、まとめて冊子に
したりもしている。
クラス全員が参加する
学級新聞づくり
毎年行っていることであるが、学
級新聞の題は、4月に学活の時間に



生徒玄関前に掲示してある全クラスの学級新聞

「トライやるウィーク」「修学旅行」の個人新聞をまとめた冊子



全員の話し合いで決める。題はクラスの顔になるので時間をとって慎重に決める。題字デザインは全員に書かせて1学期は全員のを使う。2学期からは固定で同じものを使う。発行方法はクラスを6班に分けて2日に1回のペースで班新聞として発行している。この方法だと一人必ず1つの記事を担当することになり責任感が生まれる。つまり、クラス全員が学級新聞づくりに関わることになる。

発行当初は何を書いてもよいか分からないという声をよく聞くが、慣れてくるに従いレタリングや記事内容の変化など、生徒の進歩の様子が見えるほど変化する。

今年のクラスの新聞名は「虹色（にじいろ）」。生徒たちにとって新聞づくりは全く初めてのことであり、記事内容も最初は部活動のことが多かった。しかし、徐々に各行事のこと、テストのこと、クラスでやったアンケートのこと、クラスの雰囲気のこと、授業の様子そして私シリーズ等興味のある記事も増えてきた。

新聞づくりを通してクラス全員が話し合い、まとまりが生まれる

文章を書くのがとても苦手な子ども、班の子に迷惑をかけてはいけなさと残って文章を仕上げる。新聞づくりを通して班で協力する姿勢と責任感が自然と芽生えるのである。またレタリングなどは友達の上手なところを参考にすることができる。

何より「自分たちで書いた新聞」ということで、興味・関心が高く、終学活で配った瞬間みんなの目が輝く。それからいろんな意見が飛び交うのである。

毎年感じることであるが、学級経

営の実践の一つとしてこの学級新聞づくりに取り組んでいるが、不思議とクラスは仲良くお互いを認め合えるクラスになるのである。

それは新聞づくりを通して、班のメンバーが話し合い、協力する中で班の中がまとまってくる。行事に関する記事がクラス全体の目標を全員に共有させ、クラス全体が盛り上がり、「頑張っている」という前向きな気持ちが生まれる。また記事を通してお互いの考えや意見を知ることでお互いを評価したり認め合ったりすることができる。

文章を書く力がつくというメリットもあるし、常に新聞づくりを意識して生活することで、日常の様々な出来事に対する観察力も高まっているのである。

学級新聞で「新たな発見」

1年間の全新聞はクラスの足跡

学級新聞づくりを通して私自身が生徒から学んだことは、普段の学校生活ではなかなか聞けないような意見や考えなどが盛り込まれており、伝わってくるということである。生活ノートを通して毎日生徒たちと話しているが、日々の生活の内容とは異なる「新たな発見」が新聞にはある。だから、次はどんなことを書



1年間の学級通信、学級新聞をまとめた文集

いてくれるのだろうか、といった楽しみも持たせてくれる。

自身はクラスのみならず学級通信「DREAM」を毎年発行しており（1学期には95号を発行）、生徒の発行する学級新聞との2種類が家庭に届く。1年間発行した学級通信と学級新聞は年度末に毎年文集として綴じている。これは私にとってはクラスの足跡であり、宝物である。

また学校新聞づくりではさらにパワーアップした「竜の子」とともに伝統校にふさわしい魅力ある新聞づくりをめざし、これからも学校全体の課題を題材にして取り組んでいきたい。